

四季吉村

既に呼べたように、秦末の乱を避け、妻子をひきつれて秘境にきたまま、外界との交渉がなく、子々孫々ここで平和に暮らしている人たちがいる。それが六朝「搜神後記」で言うところの桃源境である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tenkuuno.pdf>

しかし、これは秦末のことであり、実は、秦の始皇帝が中国を統一する前にも、揚子江の中流に揚子江文明を作った古代王国があつて、それが秦の始皇帝に滅ぼされたこと、そしてその末裔が成都の近くの秘境に逃げ延びて、現在、その子孫が今なお生き続けていることが最近わかった。その王国は古蜀国という。

三星堆遺跡は広漢市の三星堆というところにある。広漢市は、成都市のほぼ北にあり、成都市と境界を接する。遺跡のすぐ近くには、[博物館](#)があり、三星堆遺跡から発掘された青銅大立人像はじめ数々の驚くべき考古遺物が展示されているので、是非、訪れてほしいところである。

三星堆遺跡は、1929年春、当地の農民が溝を掘っていた際に玉器を見つけたことで、1931年にイギリス人牧師である V. H. Donnithorne によって発見されていた[1]。しかし、長く本格的な発掘はなされず、1980～1年に、初めて四川省文物委員会等により本格的な発掘調査が行われて、大規模の住居跡が発見された。以後、発掘が継続して行われ、1985年10月までに、東・西城壁跡が発見されて、本遺跡が古蜀王国の都城跡と見られるようになった。さらに、1986年には本遺跡の上限が約5000年前と見られるようになった。また、各種の貴重な玉器・金器・青銅器等が出土し、以上の成果により、1988年1月、国務院は本遺跡を全国重点文物保護単位に指定した。発掘調査はさらに継続され、1996年秋には日中合同の磁気探査などの科学的調査が行われた。2005年に基本的な発掘調査を終え、現在整理研究中である。

三星堆博物館の概要については、次をご覧ください。

<https://www.travel.co.jp/guide/article/14068/>

さて、以上の揚子江文明をつくった古蜀国の末裔が成都の近くの秘境に逃げ延びて、現在、その子孫が今なお生き続けているところ、それが成都の近くにある四季吉村を中心とした涼山イ族の人々である。その様子については、NHKスーパープレミアム「秘境中国 謎の

民 天頂に生きる～長江文明を築いた悲劇の民族」で放送されたが、その概要は、次のホームページに要領よくまとめられているのでそれをまず紹介したい。

https://myblog-minzi.blogspot.jp/2017/10/blog-post_29.html

「秘境中国 謎の民 天頂に生きる～長江文明を築いた悲劇の民族」

スーパープレミアム「秘境中国 謎の民 天頂に生きる～長江文明を築いた悲劇の民族」を見る。番組紹介によると「中国四川省の大涼山。山頂の秘境で、伝統の暮らしを続けてきた人々がいる。なぜ社会と隔絶された場所を選んだのか。謎をたどると、見えてきたのは中国の壮大な歴史だった」とある。さらに番組詳細を見ると「中国四川省、険しい山が連なる大涼山。その山頂の秘境で、涼山イ族の人々がシャーマンを中心とした不思議な暮らしを営んでいる。なぜこんな場所で暮らしているのか。最近の研究によって、人々は5千年前に、黄河文明と並ぶ長江文明を築いたある王国の末えいであることが分かってきた。その後、さまざまな苦難の歴史を経てここにたどり着いたのだという。イ族の伝統的な暮らしを見つめ、知られざる歴史の謎をひもとくミステリー紀行」とある。

1986年、4000年前の三星堆が発見された。発見したのは大涼山に住むイ族の人たち。発見されたものは2.6mの実人像、1.3mの黄金仮面、高さ4mの神樹などである。三星堆からは高度な古代文明をもった人々が暮らしていたと判明する。これは世界の文明である黄河文明に次ぐ第5の文明の長江文明であった。

三星堆の王国の名は古蜀国。この国の広さは3.5km²で神殿の発掘によって100以上の黄金仮面も発見された。国王はシャーマン。だが、突然姿を消す。これがイ族！？この謎を解いていく。古蜀国の符号とイ族の経文から推理する。経文には3万文字が記されている。イ族に経文を読んでもらうと50点だけ符号と文字が一致した。これだけでは謎は解けない。

なぜ大涼山「四季吉村」に住むイ族は肥沃な土地から奥地へと移り住んのか。『華陽国志』によると秦が古蜀国を討伐し南へと逃れたとある。その後も時の権力によって悉く追い打ちをかけられて南へと逃れる。その一部の民が大涼山にたどり着く。こうしてイ族は言語や文化を守った。

1970年まではイ族の固い監視で村に入れなかった。そのイ族は蕎麦と羊で暮らしている。しかし、7、8年前からインターネットも通じるようになり、さらには天まで届くといわれる「天梯」という鉄の階段も作られた。イ族は助け合って暮らしている。弔いの儀式では死者の魂は「天にかえる」、「村を守る」、「戻るべき場所へかえる」とされる。戻るべき場所とは祖先のところ。それは古蜀国の馬牧河（ムンパク）。イ族は古蜀国の末裔とわかった。

羊毛節が行われる。イ族の住む大涼山は楽山に近い。楽山は中国有数の観光地。イ族の子供たちも楽山に出て仕事をする。中国政府はイ族の住む大涼山を観光資源にしようとする。3万人が集う羊毛節。今では国を挙げてのお祭りとなった。

まだまだ未開の地域が残る中国。3000mの高地に住むイ族。それを取り上げたNHKのスーパープレミアムという特別番組が2017年12月10日に放送された。番組制作スタッフも大変だったようだが、その努力の甲斐あって、とても貴重な番組となった。さすがNHKである。

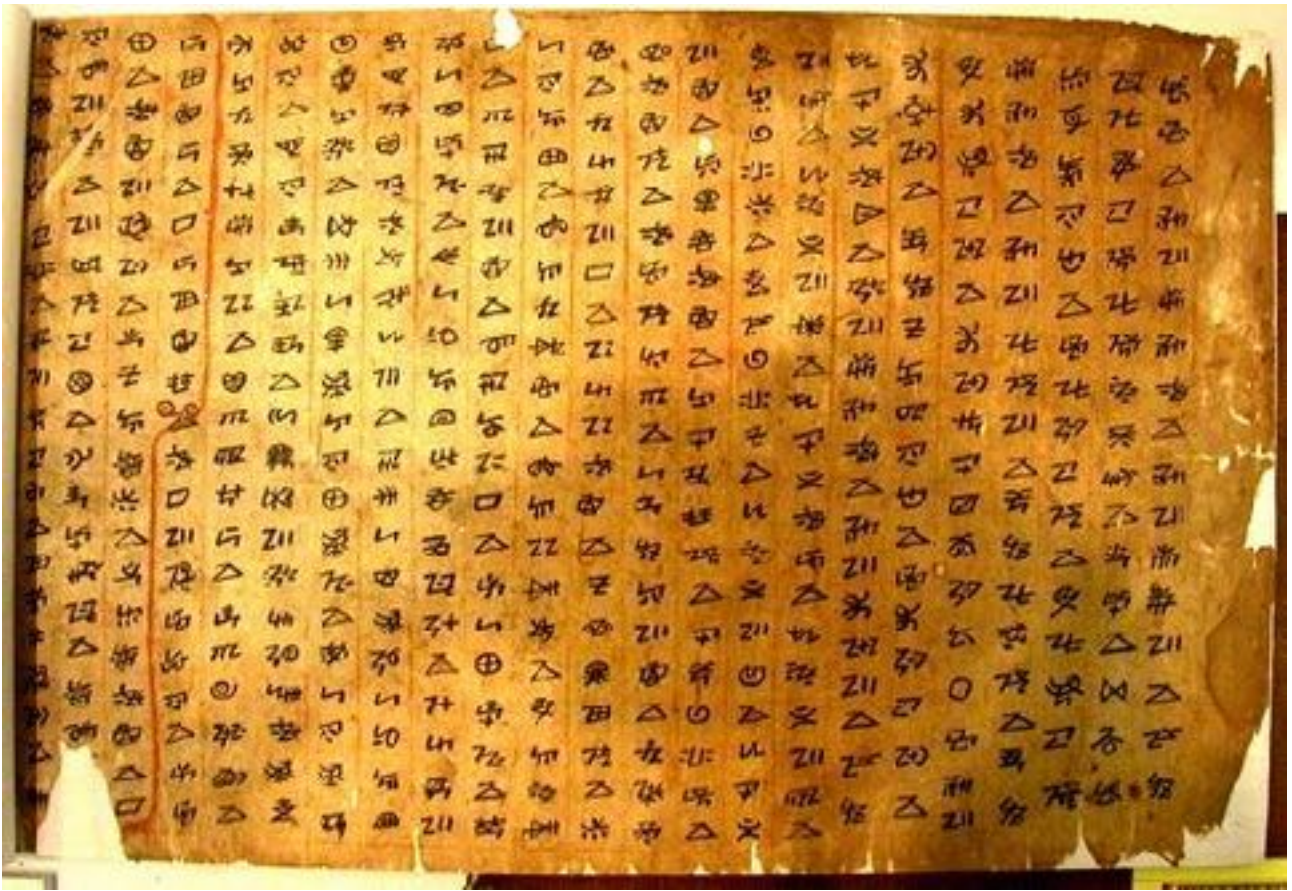
「秘境中国 謎の民 天頂に生きる ～長江文明を築いた悲劇の民族～」 by <https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2017082896SA000/>

この番組に出てくるピモという四季吉村のシャーマンについては、特に詳しい説明が必要だ。

ピモは、日頃、村人の求めに応じ、さまざまな儀式をする。



ピモは、古くから伝わる経典を持っている。



イ族（彝族）の葬儀で唱えられるお経「指路教」の文字が経典に残っている。シナ・チベット語族のチベット・ビルマ語派ビルマ・ロロ・ナシ語群に属するロロ諸語系のイ語（彝語）でイ文字（彝文字、ロロ文字）と呼ばれる表音文字で書かれている。

その文字は、三星堆の出土物の文字と同じである。



このことは、四季吉村を中心とした梁山イ族の人々が古蜀国の末裔であることを示している。

さらに驚くべきことは、ピモが葬式の時に古くから伝わる上記の経典を読むのだが、その最後に、死んだ人の魂が故郷で安らかに眠ることを祈る。

死ぬと一つ目の魂は、天にかえる。二つ目の魂は村を守る。三つ目の魂は、「祖先が元いた場所に戻らなければならない。」というのである。

ピモが葬式の時に唱える経典は、魂が最後にたどり着く地「馬牧河ムンプク」に到着すると教えている。

「馬牧河ムンプク」とは、イ族文化研究所研究者アユ・テル氏によれば、長江文明の王国古蜀国があった馬牧河流域を指すという。ここが祖先のいた地だという。イ族が古蜀国を築いた人々の末裔であることの新たな裏付けともなる。

四季吉村の位置：涼山彝族自治州（成都市の南南西200km）

<https://www.google.co.jp/maps/place/Sijijicun,+%E7%BE%8E%E5%A7%91%E7%9C%8C+%E6%B6%BC%E5%B1%B1%E3%82%A4%E6%97%8F%E8%87%AA%E6%B2%BB%E5%B7%9E+%E5%9B%9B%E5%B7%9D%E7%9C%81+%E4%B8%AD%E8%8F%AF%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD/@28.6131654,100.952646,718530m/data=!3m1!1e3!4m5!3m4!1s0x36e7c839241d46d7:0x56ebe4feba9a19ea!8m2!3d28.613167!4d103.193857?dcr=0>

州境の大部分は山岳地帯である。北部の大涼山が古来、「口口」と呼ばれたイ族の大拠点であった。

平均標高は2000～3000mであるが、4000mをこえる峰もある。

大涼山の山頂近くには、森や草地が広がっている。その広大な草地では、夏、牛やヤギの放牧が行われている。

その森や草地を少し降りたところに四季吉村がある。高度3000mぐらいのところか。大梁山には多くのイ族村があるが、四季吉村が一番高いところにある村であり、その他の村の中心となっている。四季吉村のシャーマンは、全村に尊敬されているNO1のシャーマンだ。



(<http://www.lvyougl.com/lvyou/xiangcunyou/332646.html> による)

この写真は四季吉村より少し上がったところの写真のようであるが、これよりさらに上には広大な牧草地があって、他の村から多くの羊を預かって飼育している牧畜を専門とする人がある。それらの肉は天然の草をたらふく食って育っているのも、非常にうまいらしい。

麓の街・**樂山市**の大学に留学する村長の息子は、1か月のアルバイトの賃金が、村での年収分に匹敵する。そのアルバイトとは、村で放牧により育てた羊の焼き肉を売ることであった。都会人は放牧肉の旨さを求めている。

そこで、父である村長に食肉ビジネスを村で起業し、村人を雇用し生活向上に寄与する方策を思い立ち、銀行の融資を受け、食肉販売の全国展開を提案した。父にはとても理解できない息子の考えであった。

父は「余分な大金が村に入ってくると良いことはない。これまで平穏だった村のみんなの心が乱れてしまう。私が最も心配していることは、お金が原因で村人みんながもめることだ。そこを考えてくれ。」という。

息子は父の言うことは理解できるが、自分の願いは、村人みんなを裕福にすると信じている。

このシーンは、何かを暗示しているようであった。

村のお祭りには、既にツアーで訪れた観光客のカメラの放列が並び、既に村に何かが起こり始めていることを示唆していた。